

里地里山30選コンテスト

懐かしいふるさとの風景を守ろうと取り組んでいる団体を顕彰する「日本の里地里山30 保全活動コンテスト」(読売新聞社主催、環境省共催)で、県内からは、里山固有の生物の保全をし、「里山案内人」の養成活動などを

続ける海南市のNPO法人「自然回復を試みる会 ビオトープ孟子」が、全国30団体の中に選ばれた。理事長の北原敏秀さん(55)は「里山作りは人づくり。村おこしにつなげたい」と喜びを語った。

和歌山

海南のNPO輝く



資料館前のテラスで「四季折々で違う顔を見せる里山の良さを伝えていきたい」と話すスタッフたち(海南市で)

自然体験の場 児童らに提供

を掘ることから始めた。

場所にした」と抱負を話す。

二〇〇二年八月、NPO法人認可を受け、現在は二・三畝に約十五個の池が完成。べれるおかげ」と北原さん。

ニイトトンボ、アオヤンマなど希少種も含めた約六十種のトンボ、サンコウチョウ、キビタキなど百種類以上の野鳥が訪れる。

トンボやクワガタなどの標本や写真などを展示した資料館を行う。

活動の拠点海南市北東部の不動谷。約四十年前までは谷間に水田が連なり、子どもたちはトンボやセミを追いかけて遊んだという。しかし、休耕田が増え、雑草木が生い茂り「かつての姿」と、一九九八年二月、北原さんら三人が、ビオトープ孟子を結成。草木を刈り取り、休耕田に池

を詳しく解説する。コンテストのリポートをまとめた日浦秀文さん(69)は「里山に心を癒やしに来て欲しい」。織田元宏さん(60)は「ハイキングコースを増やし、一日中家族で楽しめる

館「山(やま)山(かみ)山(かし)孟子」も今年二月オープン。メンバーたちは分担して体験学習会などを開く。丸島康行さん(67)を中心に炭窯を建設中で、新しい学習室もまもなく完成。体験イベントや地元小中学生らの課外授業では、有本智さん(39)らが原生林から里山ができるまで

休耕田に野鳥集う池／昆虫標本などの資料館